

ポスト SGH に向けて

校長 深山 和利

「成田発！2020 年に向けてアジアの中での共生を担うグローバル・リーダーの育成」をスローガンに始まった SGH の最終報告書が完成しました。東京オリンピック・パラリンピックの開催で注目される 2020 年は、成田国際高校にとって SGH の区切りの年であると同時に新たなスタートの年でもあります。5 年間という指定期間よりもはるかに長いこれからの未来に、何を引継ぎ、発展させていくのかが問われています。

ここで、この 5 年間を通して研究目標としてきた「育成する 7 つの資質・能力」を確認したいと思います。

- 課題発見・問題解決能力
- 論理的思考力
- 多様な人々と協働するコラボレーション能力
- 相互理解を図るコミュニケーション能力
- 具体的な解決を図る企画力
- 異文化に対する受容力
- 日本文化理解と発信力

これらの「資質・能力」はグローバル社会で活躍する人材には欠かせないものであることは間違いありません。しかしながら、これらは今後、SGH の力を借りないと育成できないものでしょうか。これらは、日頃の授業や特別活動等、様々な教育活動全般で身に付けられる「資質・能力」だと思えます。お金をかけて、何か大掛かりなことをする必要はありません。SGH の指定を受ける前から本校が実践してきた取組も含めて、様々な教育活動の中でありとあらゆる「仕掛け」を施していくことで、研究目標は引き継がれていくことでしょう。

昨年、私が成田国際高校に着任したとき、ある先生が話してくれました。「グローバル・リーダーの育成はもちろん大事なことだが、私は生徒みんなにグローバル・シチズンになってほしい。」と。実際、全員がグローバル・リーダーとなることは難しいかもしれませんが、グローバル・シチズンになることはできると、この一年の取組を見て私も思っています。これからも、SGH 事業で培ったグローバル・スピリッツで、グローバル・リーダーの素養を持つ、グローバル・シチズンを育てていきたいと思えます。

結びに、これまで本校 SGH 運営指導協議員としてご指導・ご助言を賜りました藤田先生、富谷先生、江頭先生、植木先生、SGH 総括アドバイザーとしてご指導・ご助言を賜りました小松先生、また、課題研究発表会等でご指導いただきました先生方、課題研究相談会でご助言をいただきました大学院生・大学生の皆様にご心から御礼を申し上げます。

ポスト SGH，伸るか反るか

成田国際高等学校 SGH 総括アドバイザー 小松 俊明
(東京海洋大学 グローバル教育研究推進機構 教授)

SGH (Super Global High School) とは何だったのか。SGH の指定期間の最終年度を迎えた今からちょうど 1 年前の報告書にて、私は以下のメッセージで巻頭言を締めくくった。まずはその部分を抜粋して、1 年前の空気を思い出したい。**【SGH とは、教育界のプロたちがこれまでのノウハウや実績をいったんわきに寄せて、正解のない混とんとした時代にサバイバルできる若者をどう作るかを考えるきっかけであった。これからの未来社会を担う世代を社会に送り出す重責を再確認し、私たち教師は様々な妥協と決別しようではないか。】**

続々と SGH 指定を終えて、ポスト SGH の段階に入った他校の取り組みを横目に、成国の SGH 最後の 1 年間について、身を引き締める思いで応援メッセージを贈らせていただいた。この他にもポスト SGH に向けて、複数の重要なメッセージを巻頭言にしたためたつもりだ。たとえば、次の指摘である。**【SGH の取り組みほど現場の教員グループの戸惑いや、時に反発まで引き起こした教育改革は、ここ最近ではなかったのではないか。私は、SGH はいわば「黒船」であったと考えている。】**この部分は、強い思い入れをもって書かせていただいた。

ここで黒船の歴史を紐解いてみよう。嘉永 6 年(1853 年)7 月にペリーが浦賀に来航した時、江戸幕府が受けた衝撃は想像に難くないが、1 度目の来航では開国を促すアメリカ大統領の親書を渡してペリー一行は立ち去った。第 12 代将軍徳川家慶が病床にあったことを理由に開国への勧告に 1 年間の猶予を得てペリー一行を追い払ったわけだが、半年後、嘉永 7 年(1854 年)2 月にペリーは再度来航し、日本に開国を迫った。その後の出来事、いわゆる幕末に至る経緯は周知の通りである。黒船は当時の日本社会に大きな変革をもたらし、一つの時代の終焉を迎えるきっかけを作った。一方、幕末の大混乱は、後に文明開化へとつながる。

いつの時代にも混乱がある。特に時代の節目、いわば過渡期を迎えているときは、過去の多くの歴史上の出来事を紐解くまでもなく、何事もひどい状況にあるものだ。昨今の教育行政が失態続きであること、その結果、教育現場が振り回されて疲弊しており、教育者のモラルハザードの決壊までが心配されている。日本の教育水準は、世界水準と比較してどのような位置にあるのだろうか。これまでのような優位性を日本は保てるのか、とても気になる。

最後にもう一つ、昨年度の巻頭言から抜粋する。**【いわゆる「SGH 疲れ」(学校内で十分な支援体制を構築できず、一部の SGH 担当者が無理をしたことで、学校全体が疲弊した状態)で、最終年度の取り組みが 5 年間の指定期間のうち一番パフォーマンスが落ちたと振り返る高校もある。】**この警鐘から 1 年が過ぎ、SGH 指定も終わる。成国は大丈夫だろうか。世の中では、地域を代表する SGH 校の「ポスト SGH」に注目が集まっている。SGH が終わることの安堵感に包まれて、歩みを止めることがないことを祈りたい。ポスト SGH、成国は伸るか反るか。生徒や保護者、地域は見ている。教師諸君、力をあわせて頑張ろうではないか。

目 次

ポスト SGH に向けて
ポスト SGH , 伸るか反るか

校長 深山 和利
総括アドバイザー 小松 俊明

令和元年度 研究開発完了報告書 1

研究の概要

1	研究開発の推移	16
2	SGH 研究開発概念図	22

本年度の活動報告

1	課題研究基礎 第 1 学年	23
2	課題研究発展 第 2 学年	30
3	課題研究発展 第 2・3 学年	37
4	国内フィールドワーク	40
5	海外フィールドワーク	44
6	アクティブラーニング	47
7	日本文化発信プロジェクト	54
8	ボランティア・インターンシップ	58
9	海外留学・進学支援	61
10	GS 教養講座	62
11	情報発信	63

研究開発の成果と課題

1	調査結果・考察	65
2	研究開発の成果	81
3	課題	89

資 料

1	外国語教育の取り組み	91
2	各種大会・コンテストへの参加	93
3	海外交流一覧	94
4	課題研究・外部連携一覧	95
5	地域交流一覧	100
6	SGH 研究推進体制	101
7	運営指導協議会	102
8	テーマ一覧 (1 年課題研究)	103
9	果川外国語高校との交流 (新聞記事)	105

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 千葉県千葉市中央区市場町1-1
管理機関名 千葉県教育委員会
代表者名 教育長 澤川 和宏 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年 4月 1日(契約締結日)～令和 2年 3月31日

2 指定校名

学校名 千葉県立成田国際高等学校
学校長名 深山 和利

3 研究開発名

「成田発！2020年に向けてアジアとの共生を担うグローバル・リーダーの育成」

4 研究開発概要

アジア諸国・地域の人々と互いを尊重しつつ、平和的・健康的な生活を営みながら、協働してアジア全体、ひいては世界の持続的発展に貢献できるグローバル・リーダーを育成することを目的とし、以下の7つの資質・能力を育成する。

課題発見・問題解決能力 論理的思考力 コラボレーション能力
コミュニケーション能力 具体的な解決を図る企画力
異文化に対する受容性 日本文化理解と発信力

これらの資質・能力を育成するための研究開発として、行政機関、民間企業、スーパーグローバル大学等の協力を得ながら以下の「研究開発1」及び「研究開発2」を行なう。

研究開発1 GS 課題研究 (GS 課題研究基礎・発展・活用)

研究開発2 GS プログラム(課題研究以外の研究開発)

(1) 全教科の授業改善による生徒主体のアクティブ・ラーニング

(2) 日本文化発信プロジェクト

(3) ボランティア活動・インターンシップを通じた具体的な解決を図る企画力の育成

(4) 海外留学・海外大学進学、国内スーパーグローバル大学進学支援

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
運営指導協議会												
海外交流 アドバイザー												
事務補助員												
千葉大学との 連携支援												
学校訪問 事業視察												
県グローバル スクールの指定												

は新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止した。

(2) 実績の説明

SGHの対象者は、課題研究基礎【1学年全体8クラス】、課題研究発展【2学年全体8クラス】、課題研究活用【2、3学年選択】である。

ア 運営指導協議会（年2回実施）

実施日：7月19日（金）、3月10日（火）

3月10日は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止した。

イ 海外交流アドバイザー取扱要領の制定及び雇用

令和元年9月1日～令和2年3月31日まで、1名雇用した。

ウ 事務補助員取扱要領の制定及び雇用

令和元年9月1日～令和2年3月31日まで、1名雇用した。

エ 千葉大学・成田国際高等学校連絡協議会（1回実施）

実施日：3月中 場所：千葉大学国際教育センター会議室

新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止した。

オ 学校訪問・事業視察

（ア）埼玉県立和光国際高校が本校を視察 7月12日（金）

（イ）茨城県立牛久高校、同立牛久栄進高校が本校を視察 7月23日（火）

（ウ）日本文化発信「和のコラボ」を成田市長が訪問 11月4日（月）

（エ）京都府立鳥羽高校が本校SGH研究発表大会を視察 12月19日（木）

（オ）愛知淑徳大学訪問 3月25(水),26日(木)

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（30年4月1日～31年3月31日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
運営指導協議会の開催												
総括アドバイザーによる指導・助言等												
校内の研究体制整備												

連携機関との連携計画作成												
アクティブラーニングに関する教員研修												
教育課程の円滑な運用												
SGH 指定校視察・発表大会参加												
GS 課題研究基礎教材開発・実施												
GS 課題研究発展教材開発・実施												
GS 課題研究活用教材開発・実施												
GS 教養講座の実施												
国内フィールドワーク												
海外フィールドワーク計画・連携交渉												
1 年次発表会の実施												
2 年次発表会の実施												
海外姉妹校への生徒派遣												
探究型授業の推進・言語活動の充実												
日本文化発信プロジェクト												
ボランティア養成プログラムの作成												
ボランティア・インターンシップ調整												
②海外留学説明会の実施												
22 研究開発について総括・検証												

は新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止した。

(2) 実績の説明

研究全体の環境整備と研修

総括アドバイザー（東京海洋大学・小松俊明教授）による指導・助言等（3回）

実施日：7月19日(金)、12月19日(木)、1月27日(月)

校内の研究体制整備

SGH コア委員会の組織編成、課題研究委員会（1年、2年、3年）の設置
連携機関との調整及び連携（千葉大学との調整1回）

実施日：3月中（新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止した。）

研究開発1 課題研究

SGH 指定校視察・発表大会参加（5回）

実施日： 11月2日(土) 聖徳大学「高校生の体験発表会」

12月15日(日) 立教大学「第4回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会」

12月23日(日) 筑波大学「全国高校生フォーラムポスターセッション」

2月16日(日) 筑波大学「国際地理オリンピック第2次選考」

3月28日(水) 日本地理学会「高校生ポスターセッション」

GS 課題研究基礎（1年次） 教材開発・実施

期日	概要
令和元年	【導入学習】 SGH オリエンテーション
6月	【国内フィールドワークガイダンス】「グループ編成」「テーマ設定」
7月	【国内フィールドワーク事前学習】「フィールドワークコース学習」

9月	【国内フィールドワーク事前学習】「フィールドワーク計画」「訪問先事前調査」 【国内フィールドワーク実施】
10月	【国内フィールドワーク事後学習】「フィールドワークの振り返りとまとめ」
10月	【国内フィールドワーク事後学習】「まとめとテーマ再設定」
11月	【グループ研究】「研究計画書作成」「調査開始」
12月	【グループ研究】「テーマに沿った研究」 【グループ研究】「研究相談会」 【グループ研究】「SGH 研究発表大会見学及びトークセッション参加」
1月	【グループ研究】「発表準備」 【グループ研究】「発表リハーサル」 【グループ研究②】「1 学年校内 SGH 校内発表大会」 【グループ研究事後指導②】「まとめと振り返り」

GS 課題研究発展（2 年次） 教材開発・実施

期日	概要
令和元年 5月	【導入学習】「趣旨説明と活動の見通し（日本×台湾複雑紀行）」 【全体研修】「台湾社会・台湾史についての講義」「映像教材の視聴」
6月	【グループ研究】「訪問先と活動の計画立案」
7月	【グループ研究】「研究テーマの設定」「予備調査」
9月	【全体研修】〔講演〕「台湾って、何語が聞こえてくるの？」温又柔 氏（作家） 【グループ研究】「予備調査」「現地生徒との交流準備」 【課外研究】「台湾文化学習会」
10月	【グループ研究】「調査」「交流準備」 【グループ研究】「台湾修学旅行（街頭調査、情報収集、姉妹校生徒とのディスカッション、聞き取り調査、博物館訪問等）」
11月	【グループ研究】「考察とまとめ」「発表準備」 【グループ研究】「発表会」

GS 課題研究活用（2、3 年次） 教材開発・実施

期日	概要
平成 31 年 4月	【導入学習】「リトルエチオピア」「学校教育改革」の視聴 ブレインストーミング
令和元年 5月	【グループ研究】「先行研究の調査」「テーマの設定」
6月	【グループ研究】「中間発表の準備」「中間発表及び討議」
7月	【グループ研究】「課題の練り直し」「レポート作成」
8月	〔夏季休業中〕「各グループによる調査・研究」
9月	【グループ研究】「調査・研究」
10月	【グループ研究】「調査・研究」
11月	【グループ研究】「調査・研究」 【グループ研究】「プレゼンテーション準備」「校内発表事前リハーサル」

12月	【グループ研究】「SGH 研究発表大会（2年生）」「外部発表会に参加（2年生）」
1月	【グループ研究】「最終発表に向けての改善（2年生）」
2月	【グループ研究⑳㉑】「最終発表会（2年生）」「最終討議（2年生）」

GS 教養講座（YUME 講座）の実施

11月25日（月）	「グローバル化と国際協力」 講師：稲葉健一 氏（元 JICA 職員）
	「大学生によるカンボジアの今」 講師：國學院大學国際協力サークル～優志～
	「成田空港の「過去・現在・未来」と「私の夢・志」 講師：木川直樹 氏（成田国際航空株式会社）
	「言葉と文化の狭間で～通訳という仕事～」 講師：大原知子 氏（アディダス・ジャパン通訳）

国内フィールドワーク 9月25日実施（対象：1学年全員 9コース）

分野	目的・方面	訪問先
多文化共生教育	ブラジル系コミュニティ訪問（群馬県）	日伯学園、大泉町観光協会
多文化共生教育	在日外国人のための教育機関訪問（千葉・幕張）	多文化フリースクールちば 幕張インターナショナル
多文化共生	在日クルド人とクルド料理教室（埼玉県）	川口市芝公民館
多文化共生	在日ムスリムコミュニティ訪問（代々木上原）	東京ジャーミイ（モスク） 神田外語大学
多文化共生	韓国との関わり、日本の海外支援（新宿）	高麗博物館 JICA 地球ひろば
観光	農園リゾートで観光の新形態を探る（香取）	農園リゾート The Farm
環境観光	大山千枚田から環境・観光の共生（鴨川）	大山千枚田 農家民泊組合
環境（観光）	足尾銅山で公害の歴史や環境 NPO の活動を学ぶ（足尾）	足尾銅山観光 足尾環境学習センター 松木地区ほか
環境	環境問題を考える（千葉・青海）	千葉県立博物館 東京都環境公社埋立処分場

海外フィールドワーク（派遣先：マレーシア 派遣人数 2年生 10名）

月日	滞在地	訪問先
7/31(水)	クアラルンプール	
8/1(木)	クアラルンプール および近郊	市内フィールドワーク(B&S プログラム)
8/2(金)		学校訪問（都市部私立）Seri Cahaya School（授業見学、生徒・教員とのディスカッション及びインタビュー、交流活動）
8/3(土)		炭工場見学（マングローブの生態調査、木炭産業） 自然環境・生物の観察（蛍ウォッチング（エコツーリズム））
8/4(日)	ペナン	クアラ・ゲラ鳥類保護区（マングローブの働き） 沿岸漁民福利協会（漁民団体へのインタビュー、マングローブ植林） 民泊体験（スンガイ・アチェ村）
8/5(月)		学校訪問（地方部公立高）SMK Taman Widuri（授業見学、生徒・教員とのディスカッション及びインタビュー、交流活動） 民泊アクティビティ（パイナップル収穫、夕食づくり）
8/6(火)		世界遺産 Penang Heritage Trust（世界遺産・観光開発について）
8/7(水)		観光開発調査 Penang Development Corporation（開発推進者への聞き取り） ライブヒストリー聞き取り（ペナンの歴史、多民族社会）
8/8(木)		ペナン クアラルンプール 成田

1年次発表会等の実施

10月30日（水）	〔名称〕フィールドワーク報告会
-----------	-----------------

12月16日(月)	〔名称〕研究計画相談会〔講師〕大学生13名
1月27日(月)	〔名称〕校内発表会〔講師〕大学教員8名

2年次発表会等の実施

11月25日(月)	〔名称〕校内発表会
12月19日(木)	〔名称〕代表発表会(SGH研究発表大会)〔講師〕大学教員2名、その他2名
2月19、20日(水木)	〔名称〕最終発表会

海外姉妹校への生徒派遣

3月12~27日	J・F・ケネディ高校(アメリカ合衆国・アイオワ州)
3月17~30日	スプリングウッド高校(オーストラリア・プリズベン)

新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止となった。

研究開発 2-1 生徒主体のアクティブ・ラーニング(探究型授業・言語活動の充実)

アクティブ・ラーニングに関する授業公開及び教員研修

6月21日(金)	英語科による授業公開及び研究協議(文部科学省教科調査官参加)
10月30日(水)	中国語授業公開及び研究協議
1月30日(木)	英語科による授業公開及び研究協議(文部科学省教科調査官参加)
12月	授業アンケートに基づく各教科での研究協議

研究開発 2-2 日本文化発信プロジェクト

日本文化発信プロジェクト

- (1) 1年「コミュニケーション英語・総合英語」：留学生への日本文化紹介
- (2) 3年国際科「異文化理解」：日本語学校留学生との母国文化相互紹介
- (3) 3年選択科目「GS日本文化」：日本文化理解と探究
- (4) 「和のコラボ」：茶道部・書道部・箏曲部のパフォーマンスと通訳ボランティア

7月13日(土)	〔実施場所〕成田空港第2ターミナルビル
11月4日(月)	〔実施場所〕成田山書道美術館

研究開発 2-3 ボランティア・インターンシップを通じた具体的な解決を図る企画力の育成

ボランティア養成プログラムの作成

ボランティア養成：通訳ボランティア事前指導、スチューデントアシスタント事前指導等

ボランティア・インターンシップ関係機関との調整、関係事業所の開拓

ボランティア(一部)

時期	行事名	のべ参加者	仕事内容
4月、10月	成田山太鼓祭り・弦まつり	60人	外国人観光客への通訳ボランティア
夏休み・冬休み	学習支援ボランティア	80人	栄町教委と成田市立向台小学校で実施。
7月、10月、2月	成田市国際交流協会行事	10人	国際市民フェスタ補助、New Year Party 補助
12月	スチューデントアシスタント	24人	成田小学校にて英語授業指導補助
3日間	吹奏楽部各種イベント活動	129人	特別支援学校・地域イベント補助

インターンシップ

期日	概要
8月20日(火)~23日(金) のうちそれぞれ3日間	成田市中台第二保育所(1名) 成田空港ロビー(3名)

研究開発 2-4 海外留学・進学、国内スーパーグローバル大学への進学支援

②海外留学説明会の実施

期日	概要
5月10日(金)	「海外留学説明会」〔講師〕AFS日本協会
11月～1月	「トビタテ！留学JAPAN」応募指導

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1)学習プログラムの進化

1年意識調査において、「課題研究を通して自分は成長したと思える」と回答した生徒の割合が今年度はさらに向上している(2016年度:59%、2017年度:69%、2018年度:81%、2019年度:86%)。また、校内発表会の達成度・満足度も肯定的評価が81%と高い数値を示している。1年「課題研究基礎」の学習プログラムが有効に機能し、かつ改善が確実に進んでいることが確認された。

(2)外部連携

課題研究における大学等との連携

課題研究に関して、大学教員・学生等の外部人材が参画者のべ人数は、23名であった。

企業・国際機関等との連携

国内フィールドワーク、インターンシップ及びGS教養講座の事業を中心に、国内外の企業・国際機関等との定常的な連携が定着した。

研究発表大会への生徒参加

- (ア)「高校生の体験発表会」(聖徳大学)
- (イ)「第4回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会」(立教大学)
- (ウ)「全国高校生フォーラムポスターセッション」(筑波大学)
- (エ)「国際地理オリンピック第2次選考」(筑波大学)
- (オ)「高校生ポスターセッション」(日本地理学会)

(3)その他

英語力の向上

平成28年度より英語検定を1・2年生全員受験とした結果、2級以上に合格した者の数は、平成27年度113名、28年度171名、29年度188名、30年度274名、令和元年度194名と増加している。

入学生への波及効果

本校への入学志願者倍率は前年度比で若干低くなったものの高倍率が続いている。(普通科:前期2.19倍・後期1.99倍、国際科:2.04倍)

SGH第3期生の進路意識

SGH第3期生である現3年生に対して、今年度も進路意識に関するアンケート調査を行った。調査の結果、3年生全体で38.5%(昨年度34.5%)、課題研究活用選択者で76.4%(昨年度46.3%)の生徒に課題研究の経験が進路選択に影響を与えたと回答している。特に「専攻分野への影響」では、全体11.1%(昨年度9.9%)、選択者18.4%(昨年度16.7%)という結果であり、課題研究の学習が進路選択に直結していることが今年度も確認できた。

(4)前年度からの改善点

1年「課題研究基礎」において、最終年度にあたる今年度はグループ編成をクラス内で行い、

昨年度までのクラス・学科の枠を超えた編成方法と比較した。新たな人的交流の機会は犠牲になったが、グループ活動が活性化し、発表内容・満足度・達成感で例年以上の成果を挙げた。また、研究テーマの設定時期を7月に変更することで、国内フィールドワークに対する目的意識を明確化した。

2年「課題研究発展」において、台湾修学旅行に即した学習プログラムの策定し、事前学習（導入学習・グループ学習・講演会等）、修学旅行当日の現地調査（街頭調査・姉妹校生徒とのディスカッション・博物館訪問等）、事後学習（考察とまとめ・発表会）を実施した。

SGH 指定終了後の方向性を確定した。「GS 課題研究（選択2単位）」を継続（既決事項）、「国内フィールドワーク」「海外フィールドワーク」継続を前提に民間の資金活用を検討、「総合的な探究の時間企画委員会」が入学から卒業までの3年間を見据えた学習プログラムを策定させる。「GS プログラム」（日本文化発信プロジェクト、ボランティア・インターンシップ、進学支援等）は、SGH 指定以前からの実践項目なので、今後も継続する。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発状況について

課題研究に全生徒が取り組む時間を確保するために、1・2学年の全生徒（8クラス）を対象とする「GS 課題研究基礎」（1学年・1単位）、「GS 課題研究発展」（2学年・1単位）、および3学年選択の「GS 課題研究活用」（2単位）を学校選択科目として設定した。また、これまで国際科（3クラス）の生徒のみ選択できた以下の科目を、普通科（5クラス）生徒にも選択できるように学校設定科目（選択2単位・「GS 速読」「GS 時事英語」「GS 日本文化」「中国語・韓国語・フランス語」）に変更したことで、生徒たちの興味、関心に応えることができるようになった。

「GS 課題研究（基礎・発展）」

1、2学年では、クラス・学科の枠を超えたグループ編成を行い、各グループが設定したテーマ（観光・教育・環境・共生の4分野）に基づいて全生徒が課題研究に取り組んだ。また、基本的には週1単位の科目であるが、必要に応じて「総合的な学習の時間」の一部を活用して講演会・校内発表会等を柔軟に実施することができた。

「GS 課題研究（活用）」

3学年では、1、2学年の課題研究の内容をさらに深めるために、希望生徒が個人研究およびグループ研究に取り組む選択科目として「GS 課題研究（活用）」を設定した。発表の場を校内だけでなく校外（各種発表会、連携大学・行政機関）に広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力のさらなる向上を図った。

特色ある教材開発

課題研究を効果的に進めるために、「GS 課題研究（基礎・発展）」において、以下のような教材開発を行っている。

導入学習：(a)身近な生活場面に潜む社会問題に気付く (b)グローバルな社会課題と自己との関わりを理解する (c)グローバルな社会課題の光と影の側面を理解する

ロールプレイ教材：「ペナン島とグローバリゼーション」

マレーシア・ペナン島の観光開発を題材に、様々な立場の多角的な視点から問題を捉え討論するミニディベート形式の教材

国内フィールドワーク：1学年全員参加（全8コース）

4分野（観光・教育・環境・共生）のテーマに基づくコースを設定し、課題研究の基礎を

学べるように、予備調査・情報収集（質的研究手法）・事後発表など、本校独自のプログラムを開発した。

海外フィールドワーク：マレーシア（クアラルンプールおよびペナン島）

NPO 法人パルシック・マレーシア政府観光局の協力のもと、主体的な調査が実践できるように、予備調査・調査計画立案・現地での調査・情報収集（質的研究手法）・事後発表など、本校独自のプログラムを開発した。

学習指導案・マニュアル・PPDAC サイクル表：

1、2年課題研究の年間計画に基づき、毎時間「課題研究指導案」「ワークシート」等を作成した。研究成果や指導方法の継承のために、2016年度の終わりに「課題研究の手引き」を作成した。

ルーブリック評価票：発表会用・2年学習終了時の自己評価用

9項目4段階のルーブリックを作成し、発表会の審査および生徒自身による学習評価において利用した。

(2) 高大接続状況について

1、2年の「GS 課題研究（基礎・発展）」において、以下の大学から、講演会・校内発表会・研究相談会の際に、大学教員および学部生・大学院生を外部講師として招いている。大学の主な連携先は、千葉大学・麗澤大学・明海大学・国際医療福祉大学・順天堂大学である。

(3) 生徒の変化について

1年：「7つの資質・能力」（調査では8項目）の変容

7つの資質・能力の成長（「課題発見・問題解決」は と とに分割：2016年度～2019年度の平均値）

2016～2019年度 平均	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
課題発見能力	5%	31%	53%	10%	2.3	18%	65%	14%	2%	3.0	0.7
問題解決能力	6%	38%	46%	9%	2.4	20%	62%	14%	2%	3.0	0.6
論理的思考力	4%	32%	50%	13%	2.3	17%	59%	20%	2%	2.9	0.6
コラボレーション能力	8%	42%	41%	8%	2.5	29%	52%	15%	2%	3.1	0.6
コミュニケーション能力	4%	35%	50%	9%	2.4	17%	60%	19%	2%	2.9	0.6
企画力	3%	24%	55%	16%	2.1	14%	53%	27%	4%	2.8	0.6
異文化受容性	8%	38%	42%	10%	2.4	22%	53%	19%	4%	3.0	0.5
日本文化発信	6%	38%	42%	7%	2.5	17%	55%	23%	3%	2.9	0.4

過去の調査の平均値から、1年次の「7つの資質・能力」の向上に関して、どの資質・能力とも伸びを示しており、特に「コラボレーション能力」（3.1）「課題発見能力」（3.0）「問題解決能力」（同）「異文化受容性」（同）が高い数値であり、入学時との比較では「課題発見能力」（+0.7）「問題解決能力」（+0.6）「論理的思考力」（同）「コラボレーション能力」（同）「コミュニケーション能力」（同）「企画力」（同）が高い伸びを示している。反対に数値の伸びの鈍いものは、「日本文化発信」（+0.4）「異文化受容性」（+0.5）であった。

また、成長を実感できない生徒の主な要因は、「課題設定がうまくいかない」「グループ内の協力がうまくいかない」「積極的になれない」の3点であることが確認できた。

2年：「ループリック自己評価」（9項目）の数値

ループリック自己評価（2016年度～2018年度の平均値）

9つの観点	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
深い問題意識	16%	54%	26%	4%	2.8	70%	30%
明確な課題設定	18%	48%	30%	4%	2.8	66%	34%
十分な調査	10%	45%	41%	4%	2.6	54%	45%
多角的な分析・統合	10%	54%	32%	4%	2.7	64%	35%
互いを高め合う協働	24%	43%	23%	9%	2.8	67%	32%
伝わりやすい発表	18%	56%	21%	4%	2.9	74%	25%
議論を深める質疑応答	9%	41%	43%	7%	2.5	49%	50%
有効な提案	14%	49%	30%	6%	2.7	62%	37%
共生への視点	15%	57%	19%	7%	2.8	72%	26%

過去の調査の平均値から、「深い問題意識」「互いを高め合う協働」「伝わりやすい発表」「共生への視点」の4項目が肯定的な捉え方が高く、反対に否定的な捉え方をしているものに、「十分な調査」「議論を深める質疑応答」「有効な提案」の3点であった。

また、1 全体として「7つの資質・能力」の調査に比較して数値が低くなる傾向があり、2 「7つの資質・能力」とは「コラボレーション」「課題発見」「コミュニケーション」の4項目で関連が見られ、3 否定的な項目はループリックといった指標を設定してはじめて見えてくるものであり、4 ループリックの各項目間の明確な相関関係は明らかにできなかったこと、以上4点が確認された。

2年：コンピテンシー・グローバルマインドセット・問題解決（38項目）の変容

昨年度の調査では、新たに「コンピテンシー」「マインドセット」「問題解決」の3領域38質問項目の調査を導入した。

コンピテンシー(行動特性) の変化：13項目

コンピテンシー		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
c3	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	4.5	0.96	5.0	0.87	0.5
c7	相手との協力関係を築くように心がける。	4.4	1.00	5.0	0.87	0.5
c8	反対意見にも耳を傾ける。	4.4	0.94	4.9	0.79	0.5
c2	必要ならば、最初に決めたことを変える。	4.3	1.07	4.8	0.92	0.5
c1	相手の置かれた立場や気持ちを察する。	4.3	0.98	4.8	0.89	0.5
c5	複数の選択肢を考える。	4.0	1.03	4.7	0.93	0.7
c4	複数の視点から問題の原因を考える。	3.9	1.07	4.7	0.92	0.8
c9	自分の得意な能力を活かす行動をとる。	4.2	1.07	4.7	0.98	0.5
c6	相手が意見を述べやすいように心がける。	4.0	0.97	4.6	0.93	0.6
c12	今回の出来事から、学んだことを振り返る。	3.9	1.02	4.5	1.02	0.6
c10	自分の意見を効果的に述べて相手に説明する。	3.8	1.05	4.5	0.93	0.7
c13	解決に向けて強い熱意を持ち続ける。	3.8	1.10	4.5	1.03	0.7

c11	解決が進んでいるか、途中で確認する。	3.9	1.00	4.5	0.99	0.6
	平均	4.1		4.7		0.6

グローバルマインドセット（心的態度）の変化：11項目

グローバルマインドセット		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
m1	様々な外国に行ってみたい。	4.4	1.51	5.1	1.20	0.7
m2	外国の様々な異文化に触れることは楽しい。	4.4	1.30	5.0	1.11	0.6
m8	自分のやりたいことを見つけ、情熱を傾けたい。	4.4	1.19	4.9	1.16	0.5
m7	議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	4.0	1.07	4.6	1.06	0.5
m10	海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい。	3.4	1.58	4.0	1.61	0.6
m11	将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。	3.4	1.69	3.9	1.74	0.4
m5	自分は人の役立つことができる人間だと思う。	3.3	1.14	3.7	1.22	0.4
m4	自分の短所よりも長所に目を向けている。	3.3	1.18	3.7	1.26	0.4
m9	将来は、外国の大学や大学院への留学（6ヶ月以上）も視野に入れて勉強したい。	3.3	1.68	3.7	1.79	0.3
m6	集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	3.0	1.30	3.4	1.33	0.4
m3	自分に自信がある。	2.8	1.24	3.3	1.43	0.4
	平均	3.6		4.1		0.5

問題解決能力の変化：14項目

問題解決能力		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
p10	作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる。	3.8	1.01	4.5	0.96	0.7
p12	提案を適切にプレゼンテーションできる。	3.60	1.20	4.5	1.06	0.9
p8	問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	3.7	1.01	4.5	0.92	0.7
p5	問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	3.7	1.08	4.4	1.03	0.8
p11	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる。	3.7	1.01	4.4	0.97	0.7
p9	集めたデータや情報の正確さがわかる。	3.7	1.04	4.4	1.00	0.7
p6	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる。	3.6	1.01	4.3	1.01	0.7
p1	基礎学力としての知識を持つ。	3.8	1.01	4.2	0.98	0.5
p2	関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明したりすることができる。	3.5	0.97	4.2	0.94	0.6

p3	問題の重要度の根拠を見つけることができる。	3.5	0.99	4.2	0.94	0.7
p7	問題解決に向けて仮説を立てることができる。	3.5	1.04	4.2	1.02	0.7
p4	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる。	3.4	1.00	4.1	0.97	0.7
p14	自分の発表に対する質問に適切に回答できる。	3.4	1.12	4.1	1.06	0.7
p13	提案した内容がどこまで有効かについて説明することができる。	3.4	1.05	4.00	1.03	0.6
	平均	3.6		4.3		0.7

2年終了時での平均値は、「コンピテンシー(4.7)」「グローバルマインドセット(4.1)」「問題解決能力(4.3)」であり、「コンピテンシー」が最も高い評価となった。数値の高い項目では、「7つの資質・能力」や「自己評価ルーブリック」の項目との関連が見られ、数値の低い項目では、「マインドセット」の自己肯定感に関わるものが目立った。

職員に対しても同じ項目で、重要度とSGHによる効果を尋ねてみた。職員と生徒との間には評価のばらつきが見られるが、両者の評価が一致する項目は、生徒の変容を客観的に示す指標とみなすことができる。

生徒と教員の評価が一致する項目	
プラス評価	c3・他者の立場の尊重 c7・他者との協力関係 c8・複数の視点からの原因究明 m1・様々な外国に行きたい m2・異文化に触れる m7・参加者の意見を聴く p5・チームメンバーとの協働 p12・プレゼンテーション
マイナス評価	m3・自信がある m4・長所の重視 m5・役に立つ人間 p1・基礎学力としての知識 p14・質問への回答

英語力の向上

平成28年度から、第3回英語検定を1、2年生全受験とした。その結果、取得者が大幅に増加した。

英検年度別取得状況(2020年3月12日現在)

	1級	準1級	2級	準2級
平成26年度	0	6	84	72
平成27年度	0	7	106	98
平成28年度	3	8	160	233
平成29年度	1	11	176	157
平成30年度	0	18	256	132
令和元年度	0	15	179	158

(4)教師の変化について

教科指導との相乗効果

学校評価アンケート(職員)によれば、本校職員の81%が積極的にアクティブラーニングを実践している。

[職員]アクティブラーニング型授業を取り入れ、授業改善を行っている

2016～2019年度	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	肯定的	否定的
平均値	21%	59%	19%	1%	81%	20%

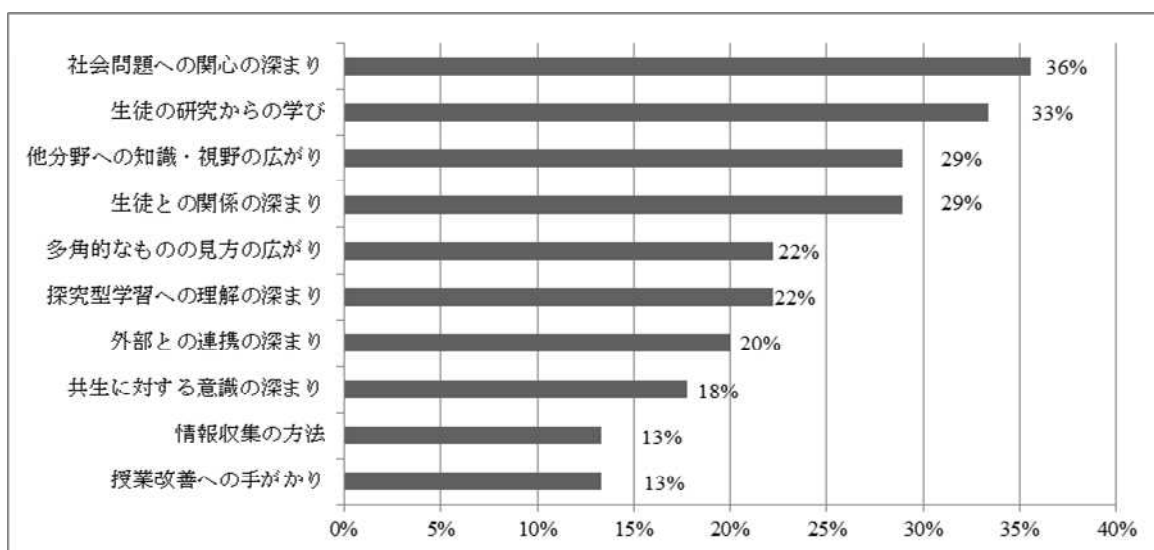
全校を挙げて課題研究を実施することにより、アクティブラーニングの必要性和有効性が

教員間に浸透し、大多数の教員が生徒の主体的・協働的な学びにつながる授業改善を行うという相乗効果がもたらされた。

職員の意識変容

課題研究を通して、グループ研究や発表の手法を学ぶとともに、「社会問題への関心」「生徒の研究からの学び」「他分野への視野の広がり」など、職員の認識面での変容が促されるとともに、生徒との関係が深まるなどの効果も一定の割合で確認された。

[職員] 職員自身の問題として、本校のSGHは自身にどのような変容があったか？(2018年度)



(5) 学校における他の要素の変化について (授業、保護者等)

授業評価について

学校評価アンケート(生徒)によれば、70%~80%の生徒が本校の授業について肯定的な評価を行っている。

[生徒] 学校評価アンケート(学習指導)・2016年度~2019年度(平均値)

	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	肯定的	否定的
丁寧で分かりやすい授業	23%	61%	14%	2%	83%	17%
教え方や教材の工夫	24%	55%	19%	2%	79%	21%
学力向上につながる授業	17%	55%	25%	12%	72%	29%

全体的に評価の数値が全体的には高いものの、職員アンケートに比べると、やや数値が低くなる傾向にある。

本校への入学志願者の増加

SGH 指定後 4 年間、本校への入学志願者が増加し高倍率が続いている。

	普通科(200名)		国際科(120名)
	前期(60%)	後期(40%)	前期(100%)
平成28年度入試	2.41	1.90	1.51
平成29年度入試	2.29	1.89	2.10
平成30年度入試	2.83	2.59	2.08
平成31年度入試	3.03	2.51	2.06
令和2年度入試	2.19	1.99	2.04

P T A 活動への波及

本校のSGH指定後、PTA国際教育委員会では、異文化体験研修を企画・実施することが毎年の恒例となった。また、2月のマラソン大会時のPTA・後援会による豚汁提供では、宗教上の理由で豚肉を食することのできない生徒のためにハラール認定を受けた食材で料理を提供するなど、生徒の学習活動とともに、保護者にも異文化に対する理解が浸透しつつある。

(6)課題や問題点について

「総合的な探究の時間」のプログラム

SGH指定終了にともない、1、2学年全生徒必修の「課題研究（基礎・発展）」は廃止されるが、これまで蓄積してきた探究型学習の実践を、「総合的な探究の時間」に生かさなければならぬ。

ただ「課題研究（基礎・発展）」のプログラムをそのまま続行することは難しいため、本校の教育理念を再検討した上で、探究型学習を再編成・再構築していく作業が不可欠となる。検討には時間を要するが、次年度に議論を重ねてプログラムを構築していきたい。

選択科目「課題研究」の継続・発展

選択科目「課題研究」の存続は既決事項である。これまでの実践を踏まえ、今後も継続・発展させていきたい。

学校のなかのグローバル：海外にルーツをもつ子どもたちへの支援

課題研究を通して生徒と協働探索するなかで明らかになってきた問題のひとつに、「学校のなかの多文化性」がある。生徒にとって身近な生活場面で「グローバル化」を見つめなおしたときに、学校文化そのものが単一的で閉鎖・抑圧的であり、海外にルーツをもつ生徒などにとって生活しづらい場であることが明らかになった。

指定終了後も、学校としてこの課題意識に向き合うべきである。さらに、海外にルーツをもつ子どもの割合は年々増加しており、個々の生徒に応じた教育支援が必要とされている。学校を真に「グローバル」で開かれたものにするためには、「課題研究」「外国語教育」といった学習指導の枠にとどまらず、学校の構造全体から不断に見直していくことが必要であろう。

具体的方策としては、以下の科目の新設を、新教育課程の実施にあわせて検討する。

- | |
|------------------------------------------------------------------------|
| (1) 外国人特別選抜入学の生徒を対象に、母語あるいは母文化を指導する学校設定科目
(2) 異文化理解・多文化共生について探究する科目 |
|------------------------------------------------------------------------|

(7)今後の持続可能性について

課題解決型の学習については、本校が研究開発に取り組んできた「課題研究」を「総合的な探究の時間」を活用して継続することを検討している。また、「課題研究」を選択科目として引き続き教育課程に設定し、生徒の探究活動を発展的に継続させる体制を確立した。

海外フィールドワーク・国内フィールドワークは継続させたい一方で、予算的措置が困難であるという問題がある。海外フィールドワークで開発した探究活動を2年次の海外修学旅行において実施できるプログラムを今年度、新たに開発・実践している。

さらに、次年度から京都府立鳥羽高等学校のWWL事業の協力校として連携する見通しであり、本校がSGH事業として研究開発した諸活動を今後は連携という新たな形で継続することを模索していくことになる。

【担当者】

担当課	千葉県教育庁教育振興部指導課	T E L	043-223-4056
氏 名	小西 一央	F A X	043-221-6580
職 名	指導主事	e-mail	k.knsh2@pref.chiba.lg.jp